

京都大学	博士 (医 学)	氏 名	谷澤 公伸
論文題目	HRCT features of interstitial lung disease in dermatomyositis with anti-CADM-140 antibody (抗 CADM-140 抗体を有する皮膚筋炎における間質性肺疾患の HRCT の特徴)		
(論文内容の要旨) 間質性肺疾患は多発性筋炎および皮膚筋炎患者の半数以上に認められ、予後因子とされる。筋炎関連間質性肺疾患は急性型と慢性型に分類され、急性型はしばしば急速に進行して治療不応性であり、致死的な経過を辿る。近年、筋炎に特異的な自己抗体である筋炎特異的抗体(myositis-specific antibody, MSA)の同定が進み、種々の MSA と筋炎の臨床病型との関連が報告されている。抗 CADM-140 抗体は clinically amyopathic dermatomyositis 患者の血清中から同定された MSA である。この抗体は急性型の間質性肺炎の発症と関連し、皮膚筋炎関連間質性肺疾患(DM-ILD)における予後不良因子である。しかしながら、DM-ILD における抗 CADM-140 抗体陽性例の画像所見は明らかにされていない。 本研究の目的は、抗 CADM-140 抗体陽性 DM-ILD の High-resolution computed tomography(HRCT)所見を明らかにすることである。我々は DM-ILD において、抗 CADM-140 陽性例と陰性例の画像所見を比較検討した。 方法は、2005～2009 年に京都大学病院で新規に診断された DM-ILD 患者 25 名を後方視的に検討した。抗 CADM-140 抗体の測定には初診時の血清を用いた。画像評価は 2 名の呼吸器内科医と 1 名の放射線科の合議によって行った。まず全肺野において、スリガラス影(ground-glass attenuation, GGA)、浸潤影、小葉内網状影、小葉間隔壁肥厚、その他の線状・板状影、小粒状影、蜂巣肺、牽引性気管支拡張、肺葉容積縮小の有無を評価した。続いて、各症例の主所見を GGA、consolidation、reticulation から選び、その分布を上下方向および水平方向に関して分類した。 対象患者 25 名のうち、12 名(48%)が抗 CADM-140 抗体陽性、13 名が陰性であった。各所見を比較すると、抗 CADM-140 抗体陽性群は小葉内網状影を認めない点において、陰性群と有意な差を認めた。全 25 例の HRCT パターンは、主所見とその分布によって、lower consolidation/GGA パターン(lower peribronchovascular or peripheral consolidation or GGA が主たる所見)、lower reticulation パターン(lower peripheral or peribronchovascular reticulation)、random GGA パターン(random peripheral GGA)、その他の 4 パターンに分類された。これらの HRCT パターンは抗 CADM-140 陽性群と陰性群で有意に異なった($P=0.002$)。陽性群では lower consolidation/GGA パターン(50%)と random GGA パターン(33%)が主たるパターンであったが、陰性群では lower reticulation パターンが多く見られた(69%)。 以上の検討より、DM-ILD において、抗 CADM-140 陽性例は lower consolidation/GGA パターンもしくは random GGA パターン、および小葉内網状影の欠損を HRCT 上の特徴とすることが明らかになった。HRCT 画像は初診時において、予後と関連する抗 CADM-140 抗体の有無の予測に有用であり、特に個々の所見の有無とともにパターン分類が簡便かつ有用である。			

(論文審査の結果の要旨) 抗 CADM-140 抗体は、皮膚筋炎関連間質性肺疾患(DM-ILD)において、予後不良因子とされる筋炎特異的自己抗体である。本研究の目的は、DM-ILD において抗 CADM-140 抗体陽性例の HRCT 画像の特徴を明らかにすることである。 2005～2009 年に京都大学病院で新規に診断された DM-ILD 患者 25 名を後方視的に検討した。診断時の HRCT 画像において、スリガラス影、コンソリデーション、小葉内網状影、小葉間隔壁肥厚、線状板状影、蜂巣肺、牽引性気管支拡張、肺葉容積縮小の有無を評価した。次に、主所見をスリガラス影、コンソリデーション、網状影から選び、その分布を上下方向および水平方向に分類してパターン化した。 抗 CADM-140 抗体陽性群(n=12)は、陰性群(n=13)と比較して有意に小葉内網状影の頻度が低かった。画像パターンは、下肺優位のコンソリデーション/スリガラス影、下肺優位の網状影、ランダムなスリガラス影、その他の 4 パターンに分類され、陽性群と陰性群で有意に異なった。陽性群は下肺優位のコンソリデーション/スリガラス影 (50%)とランダムなスリガラス影 (33%)、陰性群は下肺優位の網状影が主であった(69%)。 HRCT 画像は DM-ILD の診断時において、抗 CADM-140 抗体陽性例の鑑別に有用であった。本研究は、DM-ILD の予後予測や治療方針の決定に寄与するところが大きい。したがって、本論文は博士 (医学) の学位論文として価値あるものと認める。 なお、本学位授与申請者は、平成 24 年 2 月 23 日実施の論文内容とそれに関連した試問を受け、合格と認められたものである。			
要旨公開可能日： 年 月 日 以降			